

聖書:士師記4章11～24節

説教:主があなたに先立つ

1 神の戒め (申命記7章1, 2節)

モーセはイスラエルの民に申命記7章1, 2節でこう語っていました。「あなたが入って行って所有しようとしている地に、あなたの神、主があなたを導き入れるとき、主は、(そこに住む)異邦の民をあなたの前から追い払われる。あなたの神、主が彼らをあなたに渡し、あなたがこれを討つとき、あなたは彼らを必ず聖絶しなければならない。」なぜならこの異邦の民は、イスラエルの息子たちを誘惑してほかの神々に仕えさせてしまうからです。

カナンに入った最初の世代はなんとか守ることができました。しかし子どもの世代に移ると、彼らは簡単に主を捨てて、バアルの神々を拝むようになり、主の目に悪であることを行い、その結果、神である主は怒りを燃やし、カナンの王ヤビンの手にイスラエルを売り渡し、二十年間そのことで苦しまなければならなくなります。その苦しみに耐えかねてイスラエルが主に救いを叫び求めたとき、主は女預言者バラクを備え、ケ二人であったヤエルの手を通して敵であったシセラが倒されてイスラエルは救われていきます。このようにして申命記7章のみことばは確かに成就することになりました。でもここに書かれているのはそれだけなのか。そしてまた、ヤエルはなぜシセラを倒そうと決心したのか。そこにどのような主のみこころがあったのか。ともに考えてまいります。

2 戦い

1) 「今日」

この戦いは、女預言者デボラがアビノアムの子バラクを呼び出した場面から始まります。そのとき6, 7節でこう語っていました。「イスラエルの神、主はこう命じられたではありませんか。

『行って、タボル山に陣を敷け。ナフタリ族とゼブルン族の中から一万人を取れ。わたしはヤビンの軍の長シセラとその戦車と大軍を、キシオン川のあなたのところに引き寄せ、彼をあなたの手に渡す』と。」

これを聞いたバラクはデボラもいっしょに行くならばという条件をつけて敵と戦う決断をし、言われたとおりにタボル山に戦力を集めます。

いっぼうのシセラは、タボル山の近くを流れるキシオン川の川縁に九百台の戦車を集めて向き合

います。どちらが先に動き出すか、しばらくにらみ合いが続いた後、デボラが叫びます。14節。「立ち上がりなさい。今日、主があなたの手でシセラを渡される。主があなたに先立って出そして続く15節。「主は、シセラとそのすべての戦車とすべての陣営の者を、剣の刃をもってバラクの前で混乱させられた。シセラは戦車から飛び降り、自らの足で逃げた。」

当時の最先端の兵器であった戦車を何台も所有するシセラに勝つことのできる者はひとりもいない。だれもがそう予想していました。それなのにあっけないほどに形勢は逆転して、シセラが逃げだしていく。いったい何が起きたのでしょうか。ここだけでは分かりません。

2) 主の備え

そこで5章の4, 5節を見るとこう書かれている。「主よ。あなたがセイルから出て、エドムの野から進んで行かれたとき、大地は揺れ、天も滴り、密雲も水を滴らせました。山々は主の前に流れ去りました。シナイさえも イスラエルの神である主の前に。」

おわかりでしょうか。デボラはずっと空を見上げて雨が降るのを待っていたのです。その雨が降ってきたときデボラは叫んだのです。「今日、あなたの手でシセラを渡される。」降ってきたのは滝のような雨です。キシオン川の川幅は雨水を集めてどんどん膨れ上がり、とうとう氾濫してしまう。そうしたら戦車は、泥に足もとをすくわれて動けなくなる。いっぼうイスラエル軍は山の上です。雨の影響はほとんどない。これで勝敗は決まりました。最も頼りにしていた戦車はいまや足手まといになるばかり。シセラは戦車を捨てて足で逃げるしかありません。

なぜタボル山だったのか、なぜキシオン川だったのか、最初は分かりませんでした。でもこうしてみると、そこでなければならぬ理由があったことがこれでわかります。これが主の備えです。

3) ケ二人：モーセのしゅうとイテロの子孫

それだけではありません。備えはまだあります。シセラが逃げ込んだ天幕の持ち主はだれであったか。ケ二人へベルであったこと書かれている。いったいケ二人とはだれなのか。1章16節を読むと、ケ二人はモーセのしゅうとイテロ(11節ではホババ

と呼ばれていますが同じ人です)の子孫であったと書かれています。イテロのことは、出エジプト記の最初に出てきます。まだ若かったモーセがエジプトから逃げてきたときはモーセを自分の娘の婿として迎え、やがてモーセがイスラエルを導いて荒野を旅するようになったときは、モーセにいろいろとアドバイスをして助けたのがイテロで、その子孫がケニ人と呼ばれていました。この士師記が書かれた頃は、おそらく政治的な理由によってでしょう、ヘベルの家はシセラの側と同盟を結んでいました。シセラが安心してヤエルの天幕に逃げ込んだのはそんな事情も絡んでいきます。同盟を結んでいたのですから、迎える方のヤエルはシセラをかくまわなければならない。ところがヤエルは同盟を破棄して、イスラエルの側につくことを決断し、シセラのこめかみに杭を打つという大胆な行動を起こします。ヤエルはイスラエル人ではありません。モーセ以来の遠い親戚同士だったかも知れませんが、神のみことばを守るかどうかについて義務があるわけではありません。ところがヤエルはシセラのこめかみに杭を打ち付けるという大胆な行動に出ます。なぜだろうかと考えます。

3 ヤエルを励ます主

1) 遠くで聞いていたが

ここからは推測になります。デボラが女預言者としてイスラエルの長老たちにひごろどんなことを語っていたのか、ヤエルは伝え聞いていたと思います。デボラを通して語られる神のみことばを聞きながら、イスラエル人ではない自分だけれど、なにか心を引かれるのを感じていたのだらうと思います。でも今はいろいろな事情があつてシセラと同盟を結んでいます。軽々しく動くことはできません。でもこの状態がずっと続いてよいとも思わない。そんなふう揺れ動いていました。

そんなあるとき、デボラがバラクを呼んでシセラと戦うとのうわさが聞こえてきました。おそらくそのときデボラが9節で、「主は女の手でシセラを売りわたされるからです」と語っていたこともそのとき聞いていたでしょう。もちろんそれが自分のことであるとはまったく思いもしませんでした。それはきっとデボラのことだろう。そのときはイスラエルがシセラと戦うと聞いても、自分にとってすべてがよそ事にしか感じられませんでした。

2) ある日、主の前に立つ

でもある日まったく思いがけなく、自分の天幕にシセラが泥だらけの姿で逃げ込んで来たとき、事態が一変します。もはやこの戦いは他人事ではない。あなたはどちらを取るのか。シセラか、それとも主につくのか。その戦いのど真ん中に自分がいることを自覚します。

この世での身の安全を考えるなら、もちろんシセラをかくまうという判断になるでしょう。でも主の前に立たされているのです。いっさいのごまかしができません。あなたは主を選ぶべきであると、心の深いところから語る声が聞こえます。でも迷います。すぐに決断できない。もし失敗したら、自分はもちろんですが一族すべてが殺されるのです。自分ひとりの決断で家族をそんな危険に巻き込んでいいのか。ヤエルは悩みました。それでも最後に主を選びます。なぜそれができたのか。ヤエルの信仰がすばらしいから、と言うのでしょうか。もちろんそれもあるかもしれませんが。でももし主の励ましがなかったならおそらくヤエルは決断できなかったらうと思うのです。

3) 「主は女の手でシセラを売りわたされる」

どんな励ましがあつたのか。すっかり忘れていたことを思い出します。デボラが語っていたことです。「主は女の手でシセラを売り渡される。」女の手とはだれのことか。まさに自分のことではないのか。布に覆われて眠っているシセラを見ながら、ヤエルはいま自分は一人ではないことに気がつきます。つい先ほどまで自分ひとり悩んでいました。自分ひとりで決めなければならない、その重圧に苦しんでいました。でも主はすでに約束してくださっていたのです。「主は女の手でシセラを売り渡される。」自分が決めるのではない。主が決めておられる。そして、この計画は失敗することはない。なぜなら自分がするのではない。主がこれを成し遂げてくださるのだから。そのことを悟ったとき、もうヤエルには迷いはありません。

4) 主を愛する

最初に申命記7章のみことばを紹介しましたが、そのひとつ前の6章4、5節にはこう書かれています。「聞け、イスラエルよ。主は私たちの神。主は唯一である。あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。」

6章と7章は強い結びつきがあるように思えます。7章で言われるように、イスラエルを誘惑する敵を倒すことは決して簡単なことではありません。

ヤエルのように、ときにはいのちをかけなければ
ならない難しい決断を突きつけられることがあります。

でも、主を愛するということは、そのような困難な道を通って初めて学んでいくことなのかもしれません。すべて自分の責任で、自分ひとりで決めなければならない。そう思っていたら、主がすでに準備しておられた、主がすべてのことを用意して私の歩む先に立っておられた。私がいのちをかけるのではなく、この方が十字架でいのちをお捨てになって、私たちを救おうとされている。そのお姿を見せて頂くとき、私たちは自分の力で主を愛するのではなく、あの戒めは、主ご自身が私たちを愛する者へと導いてくださるとの約束だったことに気がつきます。